

## 2014 じゃっどスタディツアー報告

じゃっど理事 小幡 順子

12月23日(火)

8:00 福岡空港集合

ベトナム航空にてハノイ経由ビエンチャン移動

ホテル着後、現地集合の泊会員と合流。ビエンチャン在住の日高葵さんも合流して会食。日高さんは、第1回学生派遣ツアーの参加者で、ツアーで知ったラオスに惚れ込み就職活動を行い、念願かなって現在ビエンチャンにある企業に勤務中です。じゃっどツアーがつながる縁に感慨深い思いでした。食後、メコン川沿いのナイトマーケットを散策しながらホテルへ。

12月24日(水)

じゃっどのラオス側スタッフ Dr ソムチット、コンサップ夫妻、ラオス在住のガイド虫明氏と合流し、ビエンチャン郊外のサムケ小学校訪問。

サムケ小学校へ寄贈する机椅子への記名作業、引き続き贈与式。その後、小学校視察。贈与式の後、日本側から学生による日舞、ようかい体操の披露、お返しとしてサムケ小学校からは民族舞踊の披露がありました。

学校が準備した昼食を頂いた後、ビエンチャンから国道13号線を南へ約6時間、カムアン県タケクを目指して車で移動。

17時過ぎ、ホテル着。

古田理事提案でメコン川沿いにあるビアテラスにて夕日を見ながら一杯。ビールを片手にのぞむメコン川の向こうはタイ・ナコーンパノムという街です。タケクにはラオス～タイをつなぐ第3友好橋があり、タ

イからラオス東側国境のベトナム・チャーローまで整備された道路はアジアハイウェイとして物資流通のポイントとなっています。次回は、タイ側からタケクを訪れてみたい、などと語り合いながら暮れていく夕陽をのんびり眺めることでした。

ホテルで休息とった後、じゃっどのカムワン県における活動パートナーとなっているアイサップ・タケク事務所スタッフ3人を招待して会食、情報交換を行いました。

12月25日(木)

7時ホテルを出発して、トゥン小学校へ出発。途中タケクでもおいしいと評判の食堂でカオ・ピャク・センの朝食。

45分ほど南へ移動してトゥン小学校着。プータイ族主流の学校。トゥン小学校を含めた小学校7校のセクター中心校です。

机椅子への記名作業後、贈与式、交流会。ここでも、学生による日舞、ようかい体操が大うけ。特にようかい体操には「アンコール」がかかり、子供たちを交えてみんなで踊りました。

昼食後、さらに5分南へ移動し、セクター学校のひとつブンファナー小学校視察。トゥン小とは、さほど離れてはいませんが、モン・クメール系アコーン族主流ということで別になっています。昨年度、水道本管からトイレまでのパイプを寄贈した学校です。そのトイレは水もしっかり流れ、きれいに管理されていました。

学校のすぐ隣に、地元市場があるということで移動。売り手は近所の主婦達という感じのこじんまりした市場です。日常食品として日本では食用としないネズミヤリス

などの小動物が主な販売されていたため、学生は少々ショックを受けていたようです。

タケク東部は中国・桂林に似た地形で、ガイドの虫明氏によると「トレッキングやロッククライミングなどで欧米からの観光客が増えている地区です」ということ。また、ベトナム国境近くには大きなダムがあり、ベトナムへ電気を輸出しているとのこと。

タケク東側には多くの洞窟があるということで、タケク市内から約 20km 離れた洞窟見学。日本の鍾乳洞と比べると未整備という印象でしたが、これからどんどん観光化されるのだろうと思える環境でした。

#### 12月26日（金）

午前中、ビエンチャンへ移動

ビエンチャン着後、市内観光。ワット・ホーパケオでは結婚写真を撮るカップル遭遇。ラオスでは結婚式の前に記念撮影の前撮りとして観光名所等で民族衣装を着て記念撮影することが流行っています。一息ついたカップルにお願いして、一緒に写真を撮らしてもらうことができ、よい旅の思い出となりました。

#### 12月27日（土）

ビエンチャンからベトナム・ホーチミンへ。

ホーチミンでは 8 時間乗り継ぎ時間があったため、空港外へ出て市内観光。近年のビエンチャンのラッシュはすごいなと思っていましたが、ホーチミンのラッシュは桁違いにすごいです。国の勢いの違いを感じるひとコマでした。

#### 12月28日（日）

早朝、関西空港着。新幹線にて鹿児島帰着。

帰省ラッシュ期ではありますが、事務局が手配してくれた指定席のおかげでゆっくり座って帰ることができました。紙上にてお礼申し上げます。

これまで学生参加ツアーの場合、きれいな好きの日本人が抵抗の少ないきれいなレストランから食事を始めていました。しかし、今回はいきなりローカル食堂から始まりました。ところが、学生さん方はローカル食堂の環境を物ともせず、また学校の父兄が準備してくれた家庭料理も抵抗なく食べてくれました。食事注文を任されたものとしては嬉しい驚きでした。

また、第 1 回学生派遣ツアーの参加者である日高さんとラオスで再会することができて感無量でした。今の企業（ラオス）に就職するまでの苦勞など聞き、夢を叶えようとする思いは、行動力や探求力に変えられるのだなと強く思ったことです。今回参加された学生さん方の今後の活躍を期待します。





今回、スタディーツアーに参加させていただきありがとうございました。かけがえのない貴重な体験をすることができたと感じています。今まではラオスについてほとんど知りませんでした。しかし今ではラオスが好きだと言えます。食べ物は美味しく、過ごしやすい気候でした。そして人々は温かかったです。東南アジアに行くのは二度目でしたが、日本の当たり前が当たり前じゃないことの連続でした。刺激的な日々でした。メコン川に沈みゆく美しい夕日を眺められたことや、バロットを初めて食べたことなど、多くの写真と共に蘇る思い出は数多くありますが、私の心に深く残っているのは子供たちの笑顔です。小学校視察の際には想像していた以上の歓迎をされました。子供たちは素直で純粋な笑顔を振りまいてくれて、とてつもなく可愛かったです。この子供たちが将来の夢に向かって明るい希望を持ちながら、健康に生きて満足に勉強していったらいいと心から思いました。恵まれた日本の地を離れ、自分自身を見つめなおす良いきっかけにもなりました。残された学生生活、これからの人生の糧となる経験でした。全力で今を生きようという思いが強くなりました。じゃっどの支援は現地の大きな助けとなっていました。ラオスに多大な貢献をしていると分かりました。教師に教育をし、教師が子供たちに教え、子供たちが家庭や他の子供たちへ広げていくという「小さなお医者さんプロジェクト」には感銘を受けました。ラオスで子供たちの教育環境と衛星の向上を目指して素晴らしい活動を行っている団体が鹿児島にあることは誇りであり嬉しく思います。ありがとうございます。どんな形かは分かりませんが絶対またラオスに行きます。自己研鑽に励み、成長した自分でラオスに再会したいです。最後になりましたが、今回、ラオスを訪れるにあたり関わらせていただいた全ての方々に感謝します。本当にありがとうございました。コープチャイ！



月がぼんやりとでている朝、不安と緊張でいっぱいのスーツケースをひきずるようにして出発した。ビエンチャン到着までの道のりが長く感じられたことを今でも覚えている。

しかし、そんな不安と緊張はラオスの人々と出会って行くごとに消えていった。ラオスの人々はあたたかいということが分かった。目が合うと、照れくさそうににっと笑う。困っているときには、さりげなくそばに来て力を貸してくれる。そして何より、ひとたび宴会が始まるとなると、寡黙な人であろうと、偉い人であろうと、手と手をとりあって踊りだすのだ。子ども達だってそうだ。こちらが挨拶をすると、丁寧に胸の前で合掌をし、ちょこんと膝を折り曲げて、「サバイディー（こんにちは）」と挨拶をしてくれる。小学校訪問時には、じゃっどから贈られた新しいサッカーボールが嬉しくて、空気の入っていない状態で遊ぶような無邪気な子もいた。ラオスの人々と一緒にいると、こちらまで自然とあたたかい気持ちになれるのだ。

日本は「恵まれた国」と言われることが多い。安心・安全で、便利な物で溢れている。だが、今日の人と人どうしの繋がりにおいては関係が希薄化している。その点、ラオスは人があたたかい。物や経済の安定だけが恵まれているかどうかの尺度にはならない。心の豊かさにおいて、ラオスは日本よりもずっと「恵まれた国」だと私は思う。興味深いことに、ラオスの国花であるプルメリアの花言葉は「恵まれた人」である。

ラオスには解決しなければならない問題はある。けれども、あたたかい人に恵まれた国だからこそ解決できる問題も少なくないはずだ。スタディーツアーを終えた今の自分、そして、これからの自分に何ができるのか、じっくり考え行動をしていきたい。



今回このスタディツアーに参加したのは、発展途上国とはどのようなものなのか、また初めての海外だったため海外はどのようなものか、というのを肌で感じたかったからです。将来は青年海外協力隊に参加したいと思っているので、このスタディツアーは私にとっても合っていると思いました。名前を聞いてもどこかわからない、この国がどこにあるのか、何語を話すのかもわからない、ラオスは私にとってそんな国でした。想像とは違い首都にはホテルもあり、車もたくさん走っていて、大きな家も建っていました。また、日本のすし屋など日本語で書かれたお店も多数ありました。

私はラオスは自由な国だなという印象を持ちました。子供たちは暗くなっても遊び、バイクは4人乗りもありました。小学校に訪問した時は、歓迎されて教員の人達とお食事会をしました。食事は多くは手で食べます。日本では考えられない出来事に最初は戸惑いました。しかしラオスの人達はとても優しく、子供たちも一回も会ったことがない私たちを受け入れてくれました。写真を向けると笑顔でピースしたり、ある女の人はこの子を抱いてと言って、まだ赤ん坊の子供を抱かせてくれました。供与する机に名前を書いていると、興味があるようで子供たちはずっと見つめていました。名前を書き終わるととても笑顔になり嬉しそうで、私も嬉しくなり机を供与してくださった方々に感謝したいと思いました。しかし、この子供たちが衛生面で安全と呼ばれるにはまだ遠いと思いました。トイレには電気はなく、流すときは近くの水を直接トイレの中に入れてなければなりません。



トイレトペーパーもありません。手を洗うところもありません。その手でご飯を食べると病気になるかもしれません。私たちはまだある程度整備された学校に訪問しました。しかし、都市部から遠く離れた学校はさらに衛生面では恵まれていない状況になります。

ラオスを訪問し、日本はとても恵まれていると感じました。また、ラオスのように環境や衛生面が整っていないで、子供たちの身体が危ぶまれている、そんな国が世界にはたくさんあるのだろうと思いました。私たちができることは限られているかもしれませんが、しかしそのような国があるとまず知ることが大事だと思います。これからさらに勉学に励み、青年海外協力隊として発展途上国に貢献できるような看護師になろうと改めて思ったスタディツアーでした。



なにも考えず、ラオスの国の場所さえ知らずにツアー参加いたしました。自分の子供の頃にタイムスリップした感覚で、なんとなく懐かしく心あたたまる景色でした。

#### 小学校の様子

- ・小学校視察で、子供たちの大歓迎に驚いた。
- ・子供たちの 目の輝き 笑顔がすばらしかった。
- ・日本では考えられないが、小学校の校庭に、にわとり・犬・豚などが同居していても、なにも違和感がなく大きな木の下で吹く爽やかな風がとても気持ちよかった。
- ・物質的な豊かさは無くても、なんとなく日本では感じられないこころの豊かさを大いに感じられた。

#### メコン川で

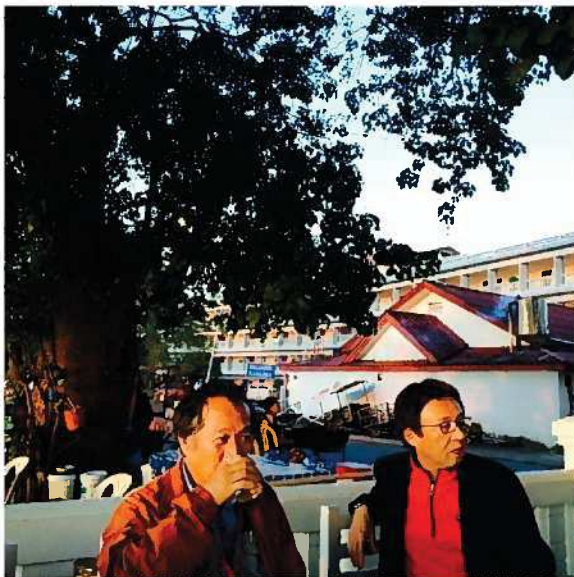
- ・メコン川に沈む夕日を見ながら、ビールを飲むチャンスに恵まれた。
- ・大げさに言うと、夕日一つで生きていて良かったと感動した。
- ・この夕日を見るだけでも、スタディツアーに参加した価値が十分にある。

#### 食事について

- ・食事はどうだろうかと心配をしていたのだがとても美味しかった。
- ・食事担当の小幡さんのはからいで日本人向けの料理だったみたい、配慮いただきありがとうございます。
- ・ただし、爆弾注意！！（唐辛子） 激辛はたまりませんでした。

#### 若者たち

- ・同行した大学生たちのたくましさにも感動。子供達とすぐ溶け込んで感心した。
- ・還暦を過ぎた私ですが、学生たちに、あとひと頑張りの気持ちを頂いた。



ビエンチャンから約5時間の車移動を経てターケーク到着後、メコン川に沈む夕陽を眺めながらビアラオで乾杯！

私・今村（左） 古田理事（右）

- ・小幡談  
「別料理を頼んだのではなく、日本人好みの料理中心に注文しただけです。」  
辛さは遠慮なしのラオスレベルでしたよ！



2014 じゃっどスタディツアー  
2014/12/23-12/28

